

四年目の被災地から

師走に祈る

5

腹の底に響くような低く、重厚な鐘の音が、かさ上げ工事をしている重機のエンジン音に混じり合った。

東日本大震災から三年九カ月となった今月十一日、岩手県大槌町の江岸寺。住職の大萱生良寛さん(五〇)は、地震発生と同時にの午後二時四十六分、また真新しいが残る濃緑色の鐘を数回、突いた。

あの日、高さ一〇センチ近い津波は沿岸の市街地をのみ込んだ後、山すそにあった江岸寺にも押し寄せた。なすすべなく、本堂、庫裏、鐘樓のすべてが流された。犠牲になった家族らの葬儀を終え、ひと区切りをつけた檀家たちがまず求めたのは、新しい鐘だった。実は、津波に流された鐘はその後、プロパンガスの爆発による火災に巻き込まれ、溶け落ちてしまっていた。

「あの深みのある音に、人は癒やされるから」と大萱生さん。鐘は、檀家らが寄せ合った浄財と、全国の同じ宗派の寺からの寄付などで新調され、震災から二年となる昨年三月十一日、お披露目された。高さ百一

復興へ響く「つち音」



今月11日、東日本大震災の発生と同時にの午後2時46分に鐘を突く江岸寺の大萱生良寛住職(岩手県大槌町)

族を失った檀家ら百人が、一人ずつ順に突いた。「亡くなった人への鎮魂ができたという思いからか、みんな笑顔になっていった。感動したよ」と、铸造を手掛けた滋賀県東近江市の「金寿堂」の黄地浩社長(六〇)。その年の大みそかには、三年ぶりに除夜の鐘も鳴った。

同じ山すそにある三つの寺の、今年の大みそか。江岸寺は、除夜の鐘を突くの断念した。かさ上げ工事が本格化したことで、周囲に未舗装の道ばかりが増え、水たまりもあちこちにできた。「外灯もなく、真っ暗な中での参拝は危なくて」と大萱生さん。

一方、幸いにも津波被害を免れた近くの大念寺。住職の大萱生修明さん(五〇)は「なるべく多くの人と新年を祝いたい」と、今年も除夜の鐘を突く。もともと鐘を持たない蓮乗寺では、住職の木藤養頭さん(五四)が、飯の本堂で祈りをささげ、年を越すことにしている。

手、笠木透(かさぎ・とおる)さんが二十二日、直腸がんのため死去した。七十七歳。岐阜県岩村町(現・恵那市)出身。自宅は中津川市駒場一五二六の九五。俳優志見辰太郎(しんたろう)の長男。

熱情に 笠木透さん死去 77歳



日本の野外音楽祭の草分け「中津川フォークジャンボリー」(全日本フォーク

作りした。岡林信康さんや吉田拓郎さんらが出演、日本のポピュラー音楽史の伝説的イベントとなった。その後、社会派シンガーとして全国で公演した。近

長野・岐阜連携 御嶽防災強化へ

協議会発足 長野県と岐阜県にまたが

暦は 24日 祝日 秋分 きのうの気象 夕は 夏ま 安全 四十七 就いた 長は 民の安 観光客 会議 以内の